

岡崎・六ツ美のできごと

文責	谷川	巖
監修	柵木	猛
	野々山	克彦
	加藤	正男
	杉浦	勝英

歴史年表

岡崎・六ッ美のできごと

時 代	暦	で き ご と
奈 良		倭の国、日本では三河の国名を昔、次のように呼称していたと古書は伝える ・古事記 712 (和銅5) 年 「三川」 ・日本書紀 720 (養老4) 年 「参河」「三河」 ・万葉集 770 (宝亀1) 年 「水河」
	701 (大宝元)	糟目犬頭神社 神饌幣帛料供進社 大字宮地字馬場鎮座 祭神彦火火出見尊、犬頭霊神 大宝元年創立、彦火火出見尊を鎮祭し糟目神社と称す。 犬頭霊神社が合祀されるが犬頭霊神には次の由緒が伝わる 上和田城主宇都宮泰藤、貞和2年5月当社に於いて鷹狩するが、社殿の坤ノ方に大杉樹あり。泰藤樹下に憩い仮寝する。樹上に巨蛇あり、首を垂れ泰藤を呑まんとする。率いる白犬頻りに吠え警す。泰藤驚き覚む。然れどもまた眠り、犬また吠ゆ。再三にわたるに及び泰藤怒り差添えの刀を抜き犬頭を断つ。頭忽ち飛騰し蛇の喉を噛み之を殺す。泰藤驚き、かつ感じ、かつ悔いその犬をもって犬頭霊神社とし合祀する。
	710 (和銅 3)	三河・遠江・美濃 3 国に飢饉
	740 (天平 12)	国・郡・郷がきまり三河 8 郡、額田 8 郡、
	741 (天平 13)	矢作・六ッ美地区に条理制の遺構 「新城郷」「伊賀郷」「碧海郡」「河内郡」の郷名がある (和名抄)
平 安	789 (延暦 8)	三河に飢饉
	807 (大同 2)	北野廃寺焼失
	835 (承和 2)	参河国、矢作・飽海の両河川に各 4 隻の加増渡船が命じられる (太政官符) 街道の要衝として矢矧の市が栄える (大和町妙源寺周辺か)
	876 (貞観 18)	三河国式内社として日長神社 (中島町)、比蘇神社 (上和田町) 糟目神社 (宮地町) が命じられる (延喜式班幣の社)
	1044 (寛徳元)	このころ藤原季兼、富農層・大土地所有者として農業経営 (乙見荘=明大寺周辺)
	1101 (康和 3)	藤原季範 熱田大宮司となる

平 安	1174 (承安 4) 1185 (文治元)	季兼——季範——範忠の三代にわたり西三河の要 額田郡を掌中に入れる 義経、浄瑠璃姫の伝説が生まれる 鎌倉街道の宿として矢作の東宿・西宿ができる
鎌 倉 南北朝	1222 (貞応元) 1232 (貞永元) 1256 (康元元) 1267 (文永 4) 1335 (建武 2)	このころ高隆寺・滝山寺本堂できる 親鸞の三河地方巡行、 三河に真宗ひろまる 足利一族、三河地方に地盤を固める 新田義貞・高師泰の矢作河原の合戦
室 町	1452 (享徳元) 1461 (寛正 2) 1530 (享禄 3) 1542 (天文 11) 1563 (永禄 6) 1565 (永禄 8) 1575 (天正 3) 1579 (天正 7)	仁木氏の守護代西郷稠頼、岡崎城を築く 蓮如、如光のはからいで西三河各地布教 本多重次 (鬼作左)、宮地町に生まれ徳川家康に仕える。家康の三河平定後は「仏高力・鬼作左・どちへんなしの天野三郎兵衛門」と謡われ名奉行職として名を馳せる 重次が子の仙千代にあてた手紙「一筆啓上火の用心、お仙泣かすな馬肥やせ」は有名 今川義元、織田信秀小豆坂で戦う 一向一揆起るが家康、之を鎮静する (本證寺、勝鬘寺、上宮寺、善秀寺) 家康三河を平定する 長篠の戦い 土呂八幡宮建立、三八市開かれる
江 戸	1601 (慶長 6) 1603 (慶長 8) 1605 (慶長 10) 1625 (寛永 2)	板倉勝重 (1545～1624) 家康により京都所司代、在任19年に及ぶ 岡崎宿に伝馬の制が定められる 占部用水開削なる 国正、中村、定国、正名は占部郷と呼ばれたが用水路がないため水害と干害に悩んだ。慶長のはじめ正名の住人野本新十郎と中村の住人渡辺弥蔵が用水開発を計画。艱難辛苦、破産・家族離散にあいながら5ヶ年の歳月を経て完成 矢作川の改修が行われ、矢作新川できる このころ渡船や架橋が行われる (渡船場＝赤渋渡船、合飲木渡船) 風雨洪水 堤を破ること4余間、田を害すること32, 540石、家を壊すこと270戸、家を流すこと92戸、溺死者13名

江 戸	1626 (寛永 3)	4ケ年の歳月を費やし、大久保彦左衛門「三河物語」を完成させる。大久保忠教（1560～1639）
	1646 (正保 3)	矢作川堤防崩れ上青野20戸流失
	1647 (正保 4)	手永と呼ばれる行政区画をつくる 大庄屋において手永の村々を支配させた (手永制または大庄屋制)
		・ 堤通 (大庄屋名 太兵衛) 村数24 赤渋、牧御堂、法性寺、中之郷、上土井、下土井、宮地、 安藤、上福桶、下福桶、合飲木、高橋新田、上青野、 下青野、在家、上三ツ木、下三ツ木
		・ 山方 (大庄屋名 冶左衛門) 村数25 上和田、井内、野畑、下和田、坂左右、国正、中 野畑村の金山家医業を開業
	1648 (慶安元)	
	1665 (寛文 5)	中島村浄光寺の梵鐘、鋳物師安藤家により鋳造される
	1666 (寛文 6)	尾張藩に5人組制度がみられるが、岡崎領でもこの制度がみられる
	1694 (元禄 7)	助郷制度が実施される 享保10年の定助郷村
		・ 山方手永-----上和田、井内 ・ 堤手永-----法性寺、赤渋、中之郷
	1725 (享保 10)	定助郷・大助郷が本格化される (上和田、井内、法性寺、赤渋、中之郷)
	1730 (享保 15)	このころ矢作沿いに荷物の積み入れ積み下ろしのため土場が設けられる (合飲木、佐々木、赤渋) 慶長年間～明和年間にかけて「御田扇」が行われ、田植が終ると稲を害虫から守り豊作を祈願した
		・ 堤通り手永 宮地→赤渋→中之郷→上青野→高橋→ 上合飲木→下合飲木→高落→東浅井→西浅井→安藤 →福桶→下三ツ木→上三ツ木→下青野→在家→土井 →牧御堂→法性寺 (19町の順まわり)
		・ 山方手永 下六名→中六名→羽根→柱→針崎→井内→ 若松→野畑→下和田→坂左右→国正→中村 →定国→正名→永野 (15町の順まわり)
	1754 (宝暦 4)	紀行家・民俗学の先駆者として菅江真澄生まれる
	1768 (明和 5)	俳人鶴田卓池生まれる

江戸	1806 (文化 3)	六名村の庄屋斉藤家寺子屋を経営
	1825 (文治 8)	上青野村内本光寺西で本流堤100間が決壊。安藤、上・下福桶、上・下三ツ木、在家、高橋の各地で田畑冠水、被害甚大
	1833 (天保 4)	天保の大飢饉おこる (～1837)
	1843 (天保 14)	農業の発展に尽力した功労者の鶴田勝蔵、中島村に生まれる 農業の発展に努力し窮民救済のために日夜心血を注ぐ。水防工事に関する碧海・幡豆両軍の大紛糾には仲裁の労をとるとともに額田・碧海・幡豆3郡の水田を二毛作田にするため悪水排除の水路の新設に努力した
	1853 (寛永 6)	岡崎が生んだ国会議員として著名な早川龍介生まれる。戸長、村会議員・県会議員を経て衆議院議員となる 全国に率先し耕地整理事業を実施するとともに大嘗祭に献穀する悠紀斎田の主宰には村長として指導監督にあたり無事献穀と供納の大任を果たした。岡崎市の名誉市民になる
	1863 (文久 3)	世界的地理学者志賀重昂生まれる (1863～1927) 漢詩「三河男児の歌」で知られる
	1864 (元治元)	水戸藩士(尊攘派=天狗党) 追討のため岡崎藩は西三河諸藩とともに対処する
	1866 (慶応 2)	第2回長州征伐にあたり、京都の警衛にあたる
明治	1868 (明治元)	朝廷派・幕府派の対立激化。佐幕派和多田貢ら30数人脱藩 戊辰戦争、江戸幕府滅亡。明治と改元。江戸を東京に改める
	1869 (明治 2)	岡崎藩が藩校允分館(文校)、允武館(武校)が開校する 薩・長・土・肥の4藩にならい、三河の諸藩のトップをきって版籍奉還 江戸時代岡崎領である町村名 上和田、宮地、法性寺、牧御堂、井内、土井、野畑 下和田、坂左右、占部、福桶、三ツ木、合欽木、在家、 下青野、上青野、中之郷、赤渋
	1871 (明治 4)	廃藩置県。三河の10県を統合して額田県を置く 額田県の設置により県内は9の大区に分けられ額田郡は第7区とされる
	1872 (明治 5)	尾張に名古屋・犬山の2県ができる。統合して名古屋県となり太政官令により愛知県と改称。11月 額田県を統合して愛知県となる 地質学者の権威、石川成章中島で生まれる

明 治	1872 (明治 5)	学制発布、その主旨に基き次の学校が設置される ・宮地学校 (明, 6 年 10 月) ・赤渋学校 (明, 6 年 10 月) ・青野学校 (7 . 1) ・三ツ木学校 (6 . 8) ・中島学校 (6 . 8) その後の開校と統廃合 (関係分) ・六ッ美村立六ッ美中学校 1 9 4 7 (昭和 2 2) 年 六ッ美北中学校 1 9 9 2 (平成 4) 年 (井内、下和田、土井、野畑、牧御堂) ・六ッ美西部小学校 1 9 9 7 (平成 9) 年 (赤渋、中之郷、法性寺、宮地) ・岡崎市立城南小学校 1 9 7 7 (昭和 5 2) 年 (上和田、天白)
	1873 (明治 6)	岡崎の額田県庁廃止され岡崎城は政治的価値を失い取り壊される。地租改正法公布
	1876 (明治 9)	行政区画の変更、18 大区となり碧海郡は第 9 区となる
	1878 (明治 11)	郡・区・町・村編成法の公布。各区を廃し郡区の名称、各区役所の位置を定める
	1879 (明治 12)	本郡の名称 碧海 (ヘキカイ) と定められる
	1880 (明治 13)	占部村野畑の金山政五郎 (1 8 5 4 ~ 1 9 3 1) 自宅屋敷内に「愛生舎」を開設
	1882 (明治 15)	三島切れ。久後崎で矢作川決壊。碧海郡・幡豆郡・額田郡の 3 郡にわたり 1 6 箇村に被害 三河分県運動が盛んになる
	1888 (明治 21)	町村合併による新町村 (阿乎美村、中島村、占部村、糟海村) 東海道線大府～浜松間で営業開始 岡崎駅開業
	1889 (明治 22)	正名村、定国村、中村、国正村、坂左右村、下和田村、野畑村合して占部村となる 岡崎町制施行 (人口 1 5, 5 7 8 人)
	1891 (明治 24)	尾濃の土地大いに震う。人家の崩壊算なく人畜の死傷万余を数う
	1893 (明治 26)	菜種の栽培で「雲臺 (うんだい) 調査」を表わし全国各地に名を売る太田功平、土井町に生まれる
	1894 (明治 27)	青野学校、糟海学校に高等小学校を併置
	1896 (明治 29)	青野村、合飲木村、占部村、中島村、糟海村、中井村の 6 ヶ村を合して六ッ美村となる

明 治	1897 (明治 30)	下青野字井戸丸に組合立龍南高等小学校を開設
	1899 (明治 32)	岡崎馬車鉄道開通 (岡崎停車場——明大寺)
	1900 (明治 33)	杉浦製糸場設立
	1904 (明治 37)	六ッ美村に農業補習学校が設立される
	1906 (明治 39)	碧海郡占部村、糟海村、中島村、阿乎美村など合併して六ッ美村となる 町村合併により六ッ美村と改称 明治40年学校の改廃 ・ 1. 龍南高等小学校 (大字下青野) ・ 2. 六ッ美第1尋常小学校 (〃 法性寺) ・ 3. 〃 第2 〃 (〃 土井) ・ 4. 〃 第3 〃 (〃 高橋) ・ 5. 〃 第4 〃 (〃 下中島) ・ 6. 〃 第5 〃 (〃 中)
	1911 (明治 44)	岡崎新駅～西尾間13.3kmの「西三鉄道」の開業 1912年社名を「西尾鉄道株式会社」に変更
	1912 (明治 45)	明治天皇崩御。親王明宮即位大正と改元
大 正	1012 (大正元)	岡崎駅と殿橋南間に電車が開通 (岡崎電鉄)
	1914 (大正 3)	大嘗祭の斎田勅定
	1915 (大正 4)	お田植式 祓い式 (4月20日) 播種式 (4月23日) 大祓式 (9月19日) 供納 (10月16日) 大嘗祭 (11月14日)
	1916 (大正 5)	市制施行 (人口37,639人、戸数8,401戸) 岡崎町立商業学校が市立商業学校として発足 岡崎町立高等女学校も市立岡崎女学校として発足
	1922 (大正 11)	郡制の廃止 愛知県立第二中学校、岡崎中学校と改称
	1923 (大正 12)	関東大震災 愛知電機鉄道 (名古屋本線) 神宮前～東岡崎間開通
	1926 (大正 15)	市制施行十周年の記念式典を行う 六ッ美村史発行 (15年12月) 市立岡崎工業学校設立 大正天皇ほうぎょ。摂政裕仁親王践祚 昭和と改元
昭 和	1927 (昭和 2)	アメリカから平和の人形使節が送られる (梅園小学校、三島小学校、幼稚園等)

昭 和	1930 (昭和 5)	岡崎～多治見～高蔵寺間のバス路線営業開始 (岡崎・多治見線)
	1931 (昭和 6)	梅園小学校をはじめとして二宮金次郎像が普及 (勤勉・儉約の高唱)
	1932 (昭和 7)	国道 1 号線の整備改修工事完工
	1936 (昭和 11)	市制 20 周年記念行事を行う (人口 80, 722、戸数 17,132 戸)
	1937 (昭和 12)	盧溝橋事件おこる。日中両軍の衝突
	1938 (昭和 13)	自治制五十周年を祝う
	1939 (昭和 14)	岡崎市銃後奉公会が設立される
	1940 (昭和 15)	工場労働者の農繁期間勤労働員と中学校・商業学校・師範学校の勤労奉仕が始まる
	1941 (昭和 16)	日本とアメリカ・イギリスとの交戦状態に入る (太平洋戦争、当時は大東亜戦争と呼ぶ) 小学校を再編し、改組し国民学校となる (初等科 6 年、高等科 2 年、特修科 1 年)
	1944 (昭和 19)	柿崎、尾崎、宇頭茶屋の農地を埋め立て飛行場が急造される 大都市圏の学童、集団疎開する 六ッ美村 神戸国民学校 632 名 千年国民学校 245 名
	1945 (昭和 20)	12月7日東海地震がおこる マグニチュード 8.0 1月13日午前3時38分三河地震おこる マグニチュード 7.1 7月19日アメリカ B. 29 の編隊岡崎を空襲 全焼 7, 312 戸 行方不明 13 名 半焼 230 戸 被災人員 32, 068 名 死者 207 名
	1946 (昭和 21)	8月15日玉音放送。日本の敗戦 八幡町の疎開商店 200 戸が中央マーケットをつくる 日本憲法を公布 自作農創設特別措置法が施行され農地改革が行われる
	1947 (昭和 22)	教育基本法と学校教育法の公布 6・3・3・4 の学校体制の確立
	1950 (昭和 25)	秋の国民体育大会が開催され、市はバレーボール競技場となる

昭和	1955 (昭和 30)	家康祭りはじまる
	1958 (昭和 33)	六ッ美村、町制を施行
	1959 (昭和 34)	伊勢湾台風襲う { 中心気圧 929.5ミリバール 家屋全壊 約1,000戸 死者 5名
	1962 (昭和 37)	岡崎市へ碧海郡六ッ美村が合併する。市域226km ²
	1964 (昭和 39)	東京オリンピック開催される
	1965 (昭和 40)	岡崎市人口 194,408人
	1966 (昭和 41)	大嘗祭悠紀斎田の田植唄、踊り等が岡崎市無形民俗文化財に指定される
	1968 (昭和 43)	東名高速道路岡崎インターチェンジ開通式
	1969 (昭和 44)	国道248号線全線開通、旧国道248号線は県道となる
	1972 (昭和 47)	三河湾スカイライン開通
	1976 (昭和 51)	岡多線 岡崎～新豊田間19.5km貨物営業開始
	1986 (昭和 61)	岡崎市制70周年記念式典開催
	1989 (昭和 64)	昭和天皇崩御。 平成と改元
平成	1989 (平成元)	岡崎市人口30万人達成 (全国60番目。4月8日) 岡崎公園「日本の都市公園百選」に選定
	1990 (平成 2)	岡崎市東部・矢作・六ッ美・葵の4農協が合併して岡崎市農業協同組合となる 第4次岡崎市総合計画発表。テレポート構想のモデル都市に指定
	1991 (平成 3)	岡崎市民球場完工 岡崎市総合体育館完成
	1992 (平成 4)	岡崎大橋完成。家康公誕生450年祭開幕
	1993 (平成 5)	岡崎市流域関連公共下水道供用開始 新編岡崎市史全20巻完成
	1994 (平成 6)	中央地域福祉センター完成
	1995 (平成 7)	おかざき世界子ども美術博物館の入場者150万人達成 悠紀斎田80周年記念式典・香川県主基斎田と交流提携書を交わす
	1996 (平成 8)	okazaki メディアアドベンチャー開催、入場者275,000人 岡崎市美術博物館開館
	1997 (平成 9)	エフエム岡崎開局
	1998 (平成 10)	矢作川堤防リフレッシュ道路供用開始

平 成	1999(平成 11)	ねんりんピック岡崎なぎなた交流大会開催 田園地域マルチメディアモデル整備事業着工 郷土館が国の重要文化財に指定
	2000(平成 12)	ふれあいドーム岡崎オープン
	2001(平成 13)	六ッ美中部・矢作南さわやか交流館完成
	2002(平成 14)	市立図書館でインターネット検索・予約開始 おかざき自然体験の森オープン
	2003 (平成 15)	中核市に移行 江戸開府 400 年記念「徳川将軍家康」開催 人口 35 万人に達する (9 月)
	2004(平成 16)	三河武士のやかた家康館の入場者 200 万人達成 夜間の小児救急医療開設、就学前児童の医療費無料化開始
	2005(平成 17)	岡崎市・額田町合併協定調印式 (2 月) スウェーデン国王ビクトリア皇太子来岡 岡崎地域文化広場入場者 300 万人達成
	2006(平成 18)	NHK 連続テレビ小説「純情きらり」放送開始 市制施行 90 周年記念式典開催 岡崎ナンバースタート
	2007(平成 19)	中国・呼和浩特 (フフホト) 市友好都市提携 20 周年記念ツア ー開催 米河内町で第 2 東名高速道路起工式を開催
	2008 (平成 20)	中学生までの子ども医療費無料化を実施 額田鳥川ホタルの里湧水群が「平成の名水百選」に認定 時間雨量 146 mm の集中豪雨、伊賀川を中心に河川氾濫 リーマン・ブラザーズの経営破綻により市財政苦境
	2009(平成 21)	岡崎城再建 50 周年記念イベント開催
	2010 (平成 22)	「悠紀斎田」整備基本構想が発表される おかざきシルバー支援隊事業スタート 額田地域の一部が都市計画地域 (市街化調整区域) に編入され る
	2011(平成 23)	デジタル地域防災無線整備完了・運用開始 東北地方太平洋地震 (3 月 11 日) 起る 福山市との親善都市提携 40 周年記念行事が開催される
	2012(平成 24)	岡崎市総合計画第 4 期実施計画を策定。 地域交流センター六ッ美分館「悠紀の里」第 1 期建設工事始ま る。

平成		市制施行 96 周年記念式典（市民会館） 「風格のある岡崎の創生。水と緑・歴史と文化のまちづくり」 条例スタート 市長選・市議選・県議補欠選挙実施される
----	--	--

災 害 (天 災・人 災)

○上青野切れ 1646 (正保3) 年8月

水量を刻々と増加した矢作川は、遂に上青野西で堤防破れ三ツ木方面に当たって曲水路を作る。寺院・堂宇等被害を蒙って什器・御墨付き等の貴重品多くを流失する。その当時、水路に当たった所はしばらく川船で通行し、下青野慈光寺に至る間は船で上下したと伝える。耕地は全部不毛地となった。流失家屋20軒、死者14・5名といわれる。

○飢 餓 1787 (天明) 年

天明8年大荒年あり天下の人民多く餓死するという。本村(六ッ美)の住民山本茂七郎氏の手記に次のような記事がある。当時の惨状を伝える

——米1升110文 麦64文、次第に高価になり白米1升160文、玄米140文、江戸では100文について白米4合なり、三州岡崎では大根の切り売りあり、(中略)田螺を拾ひたり、藤の葉その他柔らかなる葉は何の葉にても皆摘みて食ひたり。藤の葉は有害にや腫水病するもの多し。田螺ばかり食いて命をつなぐ者は顔色眞黄となる。山中にては葛の葉・蕨根・りょうぶの葉その他何にてもとりて食ひ、後には草葉・木皮をつきて餓死するもの数知れず、実にあわれなる事共なり——

○合歓木切れ 1795 (寛政7) 年

合歓木村の正願寺西方で矢作川堤防大小8ヶ所決潰する。いまなおこの付近をハッロと称している。当時の状況記録はなく只古老の伝説があるのみである。

流失家屋56軒、良田250石が洲入となる。村民糊口に窮し乞食に出たものもありという。大正9年、85才となった人が10才のとき(清水重吉)50年忌を営み、村中遊日をなしたという。

○天白切れ 1850 (嘉永3) 年8月

嘉永3年8月額田郡天白村の地内で矢作川洪水氾濫のため堤防10数間崩壊し碧海郡川東の村落は一面の泥海となる。なかでも中嶋村は下流に当るため田畑はもちろん住家にも浸水しないものわずか数戸にしてすこぶる惨状を極める。村民一致して水防につくすが、その詮なく水除西堤浄光寺坎前後において各4ヶ所破堤する。

人気の殺気立てるなかで、西郷の各村民舟数隻を擁して中嶋の隙きをうかがい堤防を破壊する。本村民之に応戦し鋤・鍬・鳶口の打ち合いとなる。この時中嶋は西郷の4名を捕虜とし西郷は中嶋の2名を捕虜とせり。後、破堤復旧工事捕虜交換、将来の水防等につき役人より訴え出でた。

この機に及んで岡崎藩主代・中嶋領主代解決の任に当る。この天白切れの水入は古今稀な出来事として村民の脳裏に深く印象された。堤防の切口は次第に大きくなり、滞止工事

は容易にできず、その間矢作川の水は耕地を流れ、船は帆を上げてその上を通ったといわれる。水、人家の床を浸したること数日、全く交通の旧に復したのは23日の後であり穀葉の類殆んど皆無となったという。

○大地震 1852（嘉永5）

大地震がある。家屋の倒潰数十戸、地面の亀裂するところ数十箇所、実に惨状を極める。震源は信州善光寺付近であり人畜の惨死数百に及ぶ。

○天白切れ 1855（安政2）年8月

8月8日大雨がある。戌の刻、夕飯をする頃にわかに床の下に水の来るのに驚き戸外に出てみると、四面白海となっており村民狼狽なすところを知らなかった。この天白切れと同時に幡豆郡高落地内の堤防もまた決潰、矢作川の水は天白に入り高落に出て、川船は天白・高落の耕地の上を通って矢作川に出入りした。この間凡そ30日に及んだといわれる。

このような有り様は在家・三ツ木及び近隣の部落に及び水量は床上数尺に及ぶをもって飲料水は自由にならず、米穀は飯に炊く場所もなく、薪炭の用に供すべくもなく村民大いに窮乏する。

この時やや高地なるをもって浸水暫時にしてやんだ中之郷・上青野・赤渋・高橋等の諸村は食物を炊き小舟に乗って三ツ木・在家等の諸村に贈る。三ツ木・在家の人々屋根を破って顔を出し、これらの恵與物を受領したという。

○三嶋切れ 1882（明治15）年10月

明治15年9月下旬より霖雨続き特に30日の朝より豪雨盆を覆すが如しとある、10月1日夜、久後崎において40～50間程決潰し、下流碧海郡・幡豆郡・額田郡69箇村に及び良田3000余町歩一面湖水の如くになり浸水家屋200戸余り、流失戸数30戸余り、溺死37名に及ぶ惨状を生む。

1. 本村中（六ッ美）家屋に浸水せざりしは中之郷・高橋・上青野のみ
1. 上和田・井内・下和田・野畑・国正・坂左右・中村の東方の田畑の上を家屋の破れ及び家具等列をなして流れ中嶋以南にて拾われる
1. 本村内の決潰したるは野畑村字森越・坂左右字郷東・中嶋の井龍の防水堤3箇所

○大地震 1891（明治24）年10月

明治24年10月28日午前6時、尾濃の地大きく震える。人家の崩壊数えきれず人畜の死傷は数万を数える。市街地は所々に火を發し全町焦土と化したる処さえある。山は崩れ地は裂け、堤防には亀裂を生じ、橋梁は落ち、田畑に凹地を生じて泥土を噴き、にわかには池沼と化せる所さえあった。

政府は臨時費225万円を支出して救済に努める。六ッ美は遠く震源地と隔っていたが、その波震ははなはだ強く相当の損害を受ける。

糟海村の復旧工事費の補助は次の用である。

中之郷	5 9 1 円
赤 渋	3 7 6 円
井 内	9 1 円
上和田	3 4 円

糟海村の家屋損害報告

(住家)	全倒 2	半倒 1	大破 9 4	小破 3 4 1
(寺院)	大破 4	小破 5		

○降 雹 1 9 2 1 (大正 1 0) 年 1 0 月

1 0 月 2 9 日午後 4 時頃より雷鳴とともに大粒の雨をもたらし、しばらくして指頭大の雹となって地上に積ること数寸。ことに降雹の多かったのは合歓木・高橋・上青野より土井に至る一帯の土地である。

同年は気候不順で水稻の成熟期に際し連日の降雨あり、登塾不良、その上にこの降雹がある。不作の稲実はこの降雹により打ち落され稲穂はススキの如くなり田は一面稲場に粉を播いたようになる。被害総反別 5 2 町 1 反 5 畝 1 4 歩は悉く免租となりこの地価は 3 万 2 4 9 円 6 7 銭である。

赤 渋	3 町 1 反 5 畝 2 1 歩	下青野	4 町 3 反 7 畝 1 0 歩
中之郷	8 町 8 反 7 畝 1 4 歩	合歓木	1 4 町 2 反 2 畝 5 歩
上青野	1 6 町 6 反 1 5 歩	福 桶	1 町 1 反 2 畝 6 歩
在 家	1 町 4 反 3 畝 2 歩		

大字土井は相当被害は大きいが免租の出願をしなかった。

減収程度は大字によって等差があったが被害の大なる処は 1 反歩収量 5 ・ 6 斗位であったといわれる。

○関東大震災 1 9 2 3 (大正 1 2) 年 9 月 1 日

午前 1 1 時 5 8 分、震源地を相模湾西部とするマグニチュード 7 . 9 の激震が関東地方を襲った。

東京では 4 割強の建物が崩壊・消失し死者・行方不明者は 1 0 万人以上に達したといわれる。

震災時の世帯数	8 2 万 9 9 0 0 戸	震災時の人口	4 0 5 万 6 0 0 人
全 焼	3 1 万 1 9 6 2 戸	死 者	5 万 9 5 3 人
全 壊	1 万 6 千 8 4 戸	行方不明者	1 万 9 0 4 人
半 壊	2 万 1 2 2 戸		

岡崎でも強震があり、ついで余震があった。しかし当日の記録では「何ら被害なかりしを以て庁員は平常の通り執務を終りて退庁せり」（「岡崎市広報」号外 1933・10・5）となっている。それにもかかわらず市当局は救済のための活動を開始する。

9月3日 岡崎市長、大正天皇に対し天機奉伺の文書を奉呈する

内務大臣・罹災関係地方各市長に見舞電報を打つ。

4日 商工会議所会頭と連絡により市民に対し義捐金品の寄附勧誘を依頼

9月9日までに義捐金1万1,261円59銭、米・味噌・木炭・タオル・手袋・衣類・毛布等の義捐品が集められる。

5日 緊急市参事会・市会で救済費1万円の支出を議決。

6日 岡崎市医師会、救護班16名を東京に派遣する。

○東南海地震・三河地震

・東南海地震 1944（昭和19）年12月7日 13時36分

東南海地震とも東海地震ともいわれる。震源地は熊野沖で地震の規模はマグニチュード8.0であった。

報道管制下、詳細な被害状況の発表はなされないが、東海地方を中心に地震と津波による死者・行方不明者1,223名家屋等の全壊3万4,946戸の被害を出したといわれる。

東南海道地震の岡崎市の被害

岡 崎 市	総戸数19,932戸	死者6名	負傷者9名
六ッ美村	総戸数 1,697戸	（住家）全壊37戸	半壊80戸
		（非住家）全壊100戸	半壊76戸
		死者1名	負傷者5名

・三河地震 1945（昭和20）年1月13日 午前3時38分

渥美湾を震源地にマグニチュード7.1の地震発生。三河地震という。東は関東から西は中国地方に人体に感ずる地震動である。規模としては小規模である。県下では矢作川下流域の幡豆・碧海郡を中心に大被害が集中。死者2,306人、負傷者3,866人、住家全壊7,221戸、半壊1万6,555戸、非住家全壊9,187棟、半壊1万524棟に達した。

六ッ美村	総戸数1,660戸	死者13	負傷者8
		（住家）全壊119戸	半壊146戸
		（非住家）全壊172戸	半壊240戸

報道管制のため詳報は不明であるが、多くの地震体験談が伝えられている

———（前略）とにかく余震が頻発し、家の中に必要なものを取りに行くたびに運悪くグラグラと来るので、とても家の中で寝ることができない。そこで小さな藁小屋を作って10日間も暮らすはめになったのである。（後略）———

○岡崎空襲

1945（昭和20）年

1月5日 米軍機により空襲を受ける。8戸250坪焼失
5月14日 6ポンド油脂焼夷弾により2戸50坪焼失
7月20日 午前零時40分～2時30分B29約120余機に火災の被害を受ける。

岡崎空襲の被害

死者207人	行方不明13人	負傷者348人	全焼7,313戸
半焼230戸	消失面積60万坪	罹災人員32,068人	

○伊勢湾台風被害 1959（昭和34）年9月26日

9月26日18時に潮岬に上陸した伊勢湾台風（中心気圧929ミリバール、風速30メートルを超える暴風雨圏半径300キロメートル）による被害。

伊勢湾岸地域の名古屋市南部と海部郡南部にわたり高潮による大きな被害をもたらす。

岡崎市でも死者22人、重軽傷102人、家屋の全壊946戸、半壊1,820戸の被害を出す。

市は死亡者・重傷者・家屋全壊者に見舞金を贈るとともに仮設住宅378戸の建設、被災者のための相談案内所の設置、緊急融資等を行う。また全国から救援物資も届けられる。

○岡崎市の集中豪雨と河川の氾濫 2008（平成20）年8月29日

8月29日、時間雨量146ミリの局地的豪雨が岡崎市を襲う。そのため伊賀川をもとに河川が氾濫し死者1名、重体1名、行方不明者3名と床上浸水約663棟の被害を出す。この豪雨は9月15日（2008年）、リーマンブラザーズの経営破綻によるアメリカ発の世界同時不況とともに、市財政の逼迫をもたらした。

市でも橋梁の架け替えや河川改修等多額の災害対策費を必要とし、翌1年度の予算編成にあたっては、投資的経費や経常経費の減額を強いられた。

岡崎市当初予算費

一般会計	1,102億9,000万円（前年度比0.5%減）
特別会計	819億3,570万円（前年度比3.7%減）
企業会計	311億6,979万円 5.4%
総額	2,233億9,549万円（前年度比0.9%減）

六ッ美の社寺と名勝旧蹟

神 社

総 論

神社は国家の崇祀にして、祭祀は国家根本の大義なり。祭は政にして施政の根本なり。神祭の事建国の初めより今に至り終始替わることなし。神社の運営は遠く神代に起ると雖も、太古は多く神籬を樹てそれに神霊を招じ祭祀するもの多かりしが後世に至っては社殿を造り之に鎮祭することとなり。

神籬は臨時の場合のみ用うるに至る。故に居住する処、必ず神を祀るの社殿を建つ。是神国の民、神祇を尊重する所以なり。

六ッ美村誌 (大正15年刊による)

○ 郷 社 糟目犬頭神社

・所在地 大字宮地字馬場

・祭 神 彦火火出見尊 伊弉諾尊
素盞鳴尊 犬頭霊神

・祭 日 10月5日

・由 緒 上和田城主宇都宮泰藤、貞和2年5月当社に於いて鷹狩りす。社殿の坤の方に7囲余の大杉樹あり。

泰藤樹下に憩い仮寝す。樹上に巨蛇あり。首を垂れ将に泰藤を呑まんとす。率いる処の白犬頻りに吠え泰藤を警す。泰藤驚き覚む。然れども此事あるを知らず亦眠り亦吠ゆ。如此再三、泰藤怒り差添えの刀を抜き犬頭を断つ。頭忽ち飛騰し蛇の喉を噛み之を殺す。泰藤驚き且つ感じ悔い、その犬を以って犬頭霊神社とし当社へ合祀す。実に同年9月15日なりという。

・その他 明治5年9月18日 郷社に確定
明治40年10月26日 神饌幣帛料供進社指定



○ 郷 社 小園神社

・所在地 大字中島字小園

・祭 神 豊宇氣姫命

・祭 日 10月11日

・由 緒 長久元年9月15日豊宇氣姫命祀す。慶長年間、徳川家康当地へ漁獵の節屢々参拝あり。神領10石を寄付せらる。御手洗池は大昔大沼にして幡豆郡岡山村の北方鎧ヶ淵を経て川筋に通じたりし故、近村の御供米を此の池より船に積み直ちに海に出で伊勢神宮に送納したりという。

・その他 大正8年郷社に昇格せらる。



○ 村社・無格社一覧

小園神社

神 社 名	所 在 地	創 立・そ の 他
榊宮神明宮	上青野町字中屋敷62	白鳳3年創建伝承(朱)3.5石 旧村社
神明社	高橋町字屋敷3	正保年間創建 旧村社
神明社	合歓木町字平戸80	旧村社
神明社	合歓木町字下郷間183	旧村社
椿宮神明社	下青野町字本郷1	白鳳6年創建伝承(朱)3石 旧村社
神明社	在家町上五反田32	旧村社
神明社	坂左右町上堀合60	旧村社
神明社	上三ツ木町字北島16	弘仁12年創建 旧村社
三社神明社	下三ツ木町字田中6	旧村社
三宮神社	福桶町字菰原49	
中之郷神社	中之郷町字宮ノ腰40	明治41年3社を合併、旧村社
糟目犬頭神社	宮地町字馬場31	式内糟目神社か(朱)43石 旧郷社
比蘇天神社	宮地町字北浦42	式内比蘇神社伝承
八幡社	井内町字久世62	近世伊麻留八幡宮、旧村社

社宮司社	土井町字蔵屋敷 4 4	
犬尾神社	下和田町字北浦 2 4	永延元年創建 旧村社
鍬神社	野畑町字藪下 22—1	明和 4 年創建
稻荷社	国正町稻荷 5	貞観 8 年創建 旧村社
天神社	中村町八幡 1 1—5	旧称占部天神
素盞鳴神社	定国町字前田 1	大宝 2 年創建伝承 旧村社
鍬神社	安藤町字郷西 4 9	正保 2 年創建
占部川神社	正名町字中之切 34—2	
日長神社	中島町字新町 1 8	式内日長神社か (朱) 10 石 旧村社
小園神社	中島町字小園 2 2	長久元年創建 (朱) 10 石 旧郷社
住吉社	中島町字住吉西 1 0	永和 5 年創建 (朱) 3. 6 石 旧村社
八幡社	中島町字上町 5 5	昌泰年間創建 旧村社

- (注) 1. 神社名は「愛知県宗教法人名簿」(昭和 6 0 年刊)による
2. 創建・創立年代、由緒などはすべて社伝による
3. (朱)は江戸時代の朱印高を表す
4. 神社の格は六ッ美村誌(大正 1 5 年刊)による

仏 閣

総 論 (六ッ美村誌より意識・抜粋)

六ッ美で行われる宗教は仏教を以って第一とする。

仏教が本村に入ったのは聖徳太子が青野慈光寺を建立せられたのを初めとする。碧海御寺又は青野御堂と呼んだ。

古来の宗旨は天台宗に属し、幾星霜を経て、浄土宗又は真宗に転じている。

浄土宗深草派は文安年間崇福寺改宗より起り、法華宗は興国元年宇都宮泰藤に始まり、臨済宗妙心寺派は明治年間金山鶴代刀自の信仰を基とし、一箇寺をなしたのに端を発する。何れも其の以前より多少の信者はあったものの微証するものはない。

本寺のみならず近村に至るまで殆んど真宗の信者にして他宗は其の十分の一にも及ばない。これ蓮如上人自ら化導せられたる功績というべきである。

本村の地理は、太古青海原であり、中島は其の一島嶼である。漸次海水遠く去り、矢作川及び男川の流域となり、所々に池沼残って砂洲顕われ其の高き所には青草茫々と生じて原野となり、人々移住するに至った。これが青野の起った所以である。

古来、本村は洪水の害を受けしこと枚挙に遑がなかった。これがため、古記録・古器物等の存在するものは甚だ少ない。特に古記録については、天正年間田中兵部正輔岡崎城主となつてからは領内各神社、仏閣より古書類を蒐集し、焼却し、甚だしきは神祠仏廟を破毀するに至ったという。このため本村の寺院で徳川以前の古書あるいは必要な書類は一も存在するものはないと伝えられている。

○ 慈 光 寺

真宗大谷派 大字下青野字柳原63番地

朱印石高 5石

聖徳太子御即位、碧海精舎慈光明寺と称す。そもそも此の地は額田・幡豆・碧海3郡の境にして最も人民住居に適する青草茫々たる広漠の原野である。仏法弘通好因縁地なりとして此処に寺基を創め給う。時、人、碧海御寺といい、又青野の御堂と称せり。

相承第31世浄信上人、父の没後本寺に入り、天台の碩学となる。後、浄土門に入り貞永元年親鸞上人関東より帰洛の途次、当山を永く浄土真宗に改められる。

本尊 阿弥陀如来



慈 光 寺

○ 崇 福 寺

浄土宗 大字中島字上町71番地

比叡山の末流に属し天台宗であつたが、天佑上人錫を移すに及んで深草派に改め、又額を改めて崇福寺とする。大いに講聚を開いて末裔を導く。学徒蓋し300有余、末院も30有余院あり。寺料300石を領す。即ち天佑上人を以て開祖に擬し寺を檀林の随一に配する。

本尊 阿弥陀如来



崇 福 寺

○ 妙 国 寺

法華宗 大字宮地字寺北19 朱印地石高15石余

1341（暦応）年上和田城主宇都宮泰藤の妻徳子の父土岐頼直が開創したと伝えられる。泰藤は100石を寺領として寄付し、それ以後子孫大久保・久世両氏一党の菩提寺となるという。

1372（応安5）年には「和田郷法華堂」とあり14世紀創建とみられる。寺号の初見は1544（天文13）年。1603（慶長8）年8月には徳川家康朱印状で15石6升を寄進された。

本尊 釈迦如来

○ 鶴代寺

臨済宗妙心寺派 大字野畑南郷中53番地

額田郡栄枝村大字夏山隣松庵の寺号を請受し明治29年6月 19日付を以って移転許可を得、明治36年を以って寺号改称の許可を得る。

薬師如来の尊像と堂宇及び耕地弱冠を寄付し、妾の祖母の姓名に固して金華山鶴代禅寺と称す。

本尊 薬師如来

六ツ美地区寺院一覧

○ 来迎院	①なし ②上青野町字稲前西44 ③浄土宗 ④阿弥陀如来 ⑤（朱）15石 市文1
○ 済乗院	①なし ②上青野町字中屋敷96 ③浄土宗 ④阿弥陀如来 ⑤明治27年創建
○ 本光寺	①神領山 ②上青野町字荒井1 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来 ⑤稻荷神社別当伝承 教順改宗
○ 正願寺	①東井山 ②合歓木町字郷間341・342 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来 ⑤旧天台宗伝承 善円改宗 市文1
○ 慈光寺	①撫松山 ②下青野町字柳原10 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来 ⑤聖徳太子開創伝承 浄信改宗
○ 大円寺	①なし ②下青野町柳原10 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
○ 養源寺	①緑野山 ②下青野町本郷83 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来 ⑤明応3年創建
○ 西運寺	①和田山 ②坂左右町字北浦26 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
○ 春林寺	①花木山 ②福桶町字菰原59 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来 ⑤安永6年創建
○ 円立寺	①三木山 ②上三木町字北島2 ③浄土真宗本願寺派 ④阿弥陀如来
○ 大聖寺	①無動山 ②中之郷町字元山21 ③浄土宗 ④阿弥陀如来 ⑤正応年中創建 （朱）23石余

- 淨妙寺 ①稻荷山 ②中之郷町字寺あぜ 10 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
⑤正嘉2年創建
- 円教寺 ①松光山 ②中之郷町字寺畔 57 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
- 法旭寺 ①なし ②中之郷町字元山 15 ③浄土宗 ④阿弥陀如来
⑤明治初期創建
- 赤渋教会 ①なし ②赤渋町字西河原 62-2 ③浄土真宗本願寺派 ④阿弥陀如来
- 松林寺 ①常行山 ②赤渋町字蔵西 49 ③浄土宗 ④阿弥陀如来
⑤永正11年創建 (朱) 5石
- 法性寺 ①和田山 ②法性寺町字上屋敷 50 ③天台宗 ④大日如来
⑤平安中期創建
- 妙国寺 ①本寿山 ②宮地町字寺北 19 ③法華宗陣門流 ④釈迦如来
⑤興国2年日道創建 (朱) 15石余
- 永空寺 ①真薦山 ②牧御堂町字郷中 47 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
⑤明応3年創建
- 観音寺 ①城護山 ②下三ツ木町字田中 23 ③浄土宗西山深草派
④十一面観世音菩薩 ⑤大永2年創建 市文1
- 誓法寺 ①寂靜山 ②土井町字池田甲 21 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
⑤文化9年寺号公称 市文1
- 常楽寺 ①法性山 ②下和田町字高畑 9 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
- 常念寺 ①至心山 ②野畑町字北郷中 39 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
- 鶴代寺 ①金華山 ②野畑町字郷中 49 ③臨済宗妙心寺派 ④薬師如来
⑤明治36年創建
- 真妙寺 ①なし ②国正町字竹ノ下 16 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
- 永照寺 ①大御堂山 ②中村町字屋敷 10 ③浄土真宗本願寺派 ④阿弥陀如来
- 東漸寺 ①碧海山 ②中村町字屋敷 16 ③曹洞宗 ④薬師如来
- 永応寺 ①勸知山 ②正名町字観音 21 ③浄土宗西山深草派 ④阿弥陀如来
- 崇福寺 ①蘆庵山 ②中島町字道海 1 ③浄土宗西山深草派 ④阿弥陀如来
⑤昌泰年間創建 天佑竜山改派 (朱) 30石 市文2
- 後屋敷教会 ①なし ②中島町字鮫田 42-1 ③浄土宗西山深草派 ④阿弥陀如来
⑤明治年間創建
- 竜泉寺 ①万年山 ②中島町字境 21 ③浄土宗西山深草派 ④阿弥陀如来
⑤市文1
- 立信教会 ①なし ②中島町字井竜 1 ③浄土宗西山深草派 ④阿弥陀如来
⑤明治年間創建
- 淨光寺 ①良永山 ②中島町字本町 9 ③真宗大谷派 ④阿弥陀如来
⑤寛正5年創建 (朱) 3石余

- | | | | | |
|-----------|------|-------------|--------|--------|
| ○ 養樂寺 | ①石川山 | ②在家町字上5反田43 | ③真宗大谷派 | ④阿弥陀如来 |
| ⑤永正7年恵盛創建 | | | | |

- (註) 1. 寺院名は「愛知県宗教法人名簿」(昭和60年刊に準拠)
 2. 寺院の部の区分については寺院名に続いて①山号 ②所在地
 ③宗派 ④本尊 ⑤創建、その他である
 3. 創建・創立年代・開基・開山名・由緒などは寺伝による
 4. (朱)は江戸時代の朱印高をあらわす。市文は市指定文化財のこ
 とで数字は件数である。

[参照] 六ッ美村誌
 新編 岡崎市史

名 勝 旧 跡

○ 和田山法性寺旧跡

(縁起) 法性寺字上屋敷72番地。天台宗にして和田山と称す。開山・開基は年月不明。

法性寺の村名は寺号から出たものという。現在、大日堂に鬼瓦一對が保存してある。

鬼瓦の中央に丸の内に和田山とある。

又、岡崎甲山寺に仁王尊がある。そこに法性寺の名がある。天文年中(1532~1554)額田郡岡崎へ移転する。

○ 勝鬘寺旧跡附和田道場

古書に勝鬘寺は赤渋にあったとある。山号は元和田山といい現在は寂光山と言っている。

10世の時、現在の針崎に移る。和田道場はもと勝鬘寺の前身である。存覚上人一期記には真宗初めての道場といている。

○ 大聖寺蹟附正法寺旧蹟

元矢作川に堤防の大なるものはなく、砂を流して遠く坂左右方面に及び、その害、はなはだしくことに秋冬北の風強き時砂塵を吹上げ東南一帯の村民農作に苦しむ。

1680(延宝8)年、岡崎城主水野右衛門大夫忠春公の依頼をうけて、砂止めのため樹木を植えて堂宇を建立する。

大聖寺蹟に接して堤防に沿い、正法寺蹟と称する土地がある。今なお古色蒼然として墳墓散在する。昔、ここに大聖寺の末寺として正法寺と称する寺院有りという。その正法寺十王堂の什器に永教11巳未年5月15日の銘がある

○ 真宗安楽寺旧蹟

大字中島字カラムシにあり。現在は耕地であり境界は不定といえども南北およそ40間東西およそ20間ばかりの場所がある。安楽寺という。

安楽寺は永禄年間、真宗の僧侶蜂起して安楽寺に集まり家康を討たんと謀る。この時、崇福寺8代目の住僧洞山和尚末寺を馳せ集め、安楽寺に群集せる僧侶をことごとく追い払う。該寺を焼き払い家康に報告する。

家康感賞して安楽寺の什宝珍器ことごとく洞山和尚に与える。よって本尊その他今なお崇福寺に現存する。

○ 日暮志乃里

上古、この辺は海中の島興であり葦芦繁茂し、一体に芦嶋と称した。

欽明天皇の時代には、芦15,000束を貢いだといわれている。占部日良麿三河權介に任じられる。

866(貞観8)年、開発のため物部尾興らとこの地を巡視するに当たり3度の夕日となり5度巡るにまた日暮する。よって日久良志里と称するという。藤原鎌足、勅を乞うて藤原匡房を使として巡検せらしめられる。

その時日長大神に参拝の時の歌に「日久良志能、里照月爾、佐夜婦計豆、朝氣和須幾沼、日長支能美彌」とある。この地芦嶋五郷の称がある。和田・青野・占部・中島・江原である。

江原郷は現在西尾市に属し、中島は河辺郷又は河内郷と称したことがある。

○ 長円寺境内跡

中島字後屋敷にある。現在は耕地となり同寺の鎮守稻荷社のみ残り、耕地の中に現存する。社の四辺樹木あり、南北凡そ42間、東西63間。

長円寺はもと中島山永安寺と号し、宗端和尚の開基である。創造年月不詳。板倉伊賀守勝重若年の時僧となって暫く住庵があったという。

慶長年中(1596~1614)仙鱗長膳和尚の時、寺号を長円寺と改める。(1603慶長8)年、幡豆郡貝吹村へ移り萬燈山長円寺と改称する。
禅宗曹洞派で板倉家代々の菩提寺である。

○ 碧海山東漸寺旧蹟

大字中村にある禅宗の寺であり薬師坐像を安置する。

薬師瑠璃如来の由来は、天平年中(奈良時代)行基菩薩当国当所にきたり、白檀香木を以って一刀三札にして彫刻し七堂伽藍を建立し給い幾49躰の内25番目に定め給い中村東漸寺と号す。その後康安の大火にて堂宇消失する。けれども本尊薬師如来は無事である。

○ 空也邸趾

上和田字南屋敷にある。旧検地帳に「くうややしき」とあり、口碑に空也遊行してここに止まること3年にして他に移るという。

空也上人は仁明帝の皇子常康親王の子にして空也念仏の祖である。

古 戦 場

○ 上和田（小豆坂合戦）

16世紀中期、今川・松平と織田氏との小豆坂での合戦について、1542（天文11）年8月10日と同17年3月9日の2回あったという説を17年のみとする1回説がある。ここでは2回説をとり、その立場で記述する。

- I. 1540（天文9）年6月、安城を入手して西三河進出の拠点を確認した織田信秀は、佐々木に居た松平三左衛門忠倫を味方につけ、岡崎城奪取を企てた。信秀上和田に砦を築き忠倫に之を守らせた。そして岡崎に迫る。これに対し松平広忠は今川義元に救援を依頼する。8月10日、今川軍は生田原に陣を築いた。

安城にいた織田信秀は矢作を出て川を渡り小豆坂へ進軍した。ここで小豆坂を戦場にして両軍が激突、最初は今川方が優勢であったが小豆坂七本鎚と称される。7人の奮闘により盛り返して織田方の辛勝となった。

今川勢は一旦岡崎城に入ったあと駿河へ引き上げ、信秀も安城へ入った。

- II. 1548（天文17）年3月、今川義元は太原雪斎を将とする大軍を西三河に派遣し、安城城回復、西三河平定を行おうとした。今川軍の西進を知った信秀は清須を出て安城に入り、19日未明に上和田砦を出て馬頭原に陣を張ろうとした。

今川勢は藤川を出て上和田を攻めようとして小豆坂で両軍は激突した。緒戦は織田方が破れて矢作まで退却、その後再度小豆坂まで進撃するが、また追い返された。

「三河物語」は両軍の戦いを五分五分と評価しているが、世評は、敵を2度追い返して敵を多く討ち取った今川方の勝とみている。信秀は安城へ引き取り雪斎も駿河へ引き上げた。

今川・織田の2大国に挟まれた小国松平という構図は、以後桶狭間合戦後の徳川家康の自立まで続くのである。

○ 中島古戦場

中島村の城主藤原朝臣 由良太郎光兼大永元年3月6日死す。その息甚太郎光家跡を嗣ぐ。

光家の子孫八郎光重の時世が乱れる。

深溝松平大炊介好影、由良光重の城に押し寄せ戦う。城内勢微にして討ち負け、大炊助板倉弾正を中島城に置く。（三河誌）

その頃、今川氏真は東城の義安を押し込め置き、その弟義昭を東城の城主とし牛久保の牧野新次郎成定を西条にうつし、相計りて岡崎近郷を略取せしむ。（三河後風土記）

1561（永禄4）年、板倉弾正吉良荒川と一味す。家康公御下知を以って大炊助好影深溝を發して中島を攻む。板倉叶わずして中島を退き岡の城に籠る。其の功に依って中島長良兩郷を賜わる。ここにおいて其の息主殿介伊忠を中島の城に置く。（三河誌）

※ 中島城とは中島村巴城におかれた陣屋である。

○ 三ツ木古戦場

三ツ木城は、下三ツ木町字城堀にあった戦国時代の城郭である。

旧六ッ美町平野部の微高地上に立地、周囲を湿地にかこまれた要害に位置。はじめ松平信忠の子康孝が入ったが、その死後信孝が入った。

信孝は1544（天文13）年尾張の織田氏に与し、家康の松平広忠と対決した。

1547（天文16）年3月の小豆坂合戦で織田勢が敗北したため4月15日に岡崎へ打って出、菅生河原で討死にし。

2代目重忠は徳川家康に仕え大番頭、惣領家は3代目忠清のとき後嗣がなく絶家した。